



『源平盛衰記』の怪異記事：巻第一から巻第六を対象として（研究ノート）

臼井，七海

(Citation)

國文論叢別冊, 1:49-55

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483233>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483233>



『源平盛衰記』の怪異記事

—— 卷第一から卷第六を対象として

白井 七海

『源平盛衰記』（以下、盛衰記と略称する^①）は、『平家物語』諸本の中で、多彩な記事を有している。そのことは、たとえば覚一本『平家物語』（以下、覚一本と略称する^②）と比べると明らかであるが、しかし他方、盛衰記の怪異譚に特に注目した研究は多くない^③。執筆者は盛衰記が怪異譚を多く含んでいることを、他の『平家物語』諸本と異なる盛衰記固有の作品構成との関連性において意義付けられるのではないかと考えている。

本稿では盛衰記全体の作品構成を認識するための作業の一端として、便宜上、盛衰記の鹿ヶ谷事件の流れになる手前までの巻第一から巻第六までの怪異譚を具体的に検討する。

一、巻第一から巻第六の怪異譚

私見では、巻第一から巻第六に至る部分には、計八つの怪異譚が記されている。そのうち、巻第五には怪異譚は見られない。

(1) 第一の怪異譚は、巻第一「同人行陀天」の以下の部分である。「同人行陀天」は次の「同清水寺詣」において平清盛が清水寺に参詣することになるきっかけとなる事件を記した章段である^④。

清盛後憑シク思テ、弥致「精誠」、祈念シケレ共、余ノ貧者也ケレバ、倩案ジテ思ケルハ、我諸国庄園ノ主也、縦ヒ何トナケレ共、生得ノ報トテ、身一ツ助ル分ハ有ゾカシ、況清盛ガ身ニ於テヲヤ、希代ノ果報哉ト怪ム処ニ、或時蓮台野ニシテ、大ナル狐ヲ追出シ、弓手ニ相付テ、既ニ射ントシケルニ、狐忽ニ黄女ニ変ジテ、莞□（にっこり）笑ヒ、立向テ、「ヤ、我命ヲ助給ハ、汝ガ所望ヲ叶ヘン」ト云ケレバ、清盛矢ヲハツシ、「イカナル人ニテオハスゾ」ト問フ。女答云、「我ハ七十四道中ノ王ニテ有ゾ」ト聞ユ。「偕ハ貴狐天王ニテ御座ニヤ」トテ、馬ヨリ下テ敬屈スレバ、女又本ノ狐ト成テ、コウ

く鳴テ失ズ。

ここに登場するのは、途中で「黄女」に変じる「大ナル狐」である。女が「我ハ七十四道中ノ王ニテ有ゾ」と言うのを聞いた清盛は「偕ハ貴狐天王ニテ御座ニヤ」と問いかけ、馬から下りて敬屈する。すると女は狐の姿に戻ったとされている。清盛の問いかけに対して、女は肯定も否定もしていないが、その後の振る舞いは女の正体が狐であることを示唆していると考えられる。

(2) 第二の怪異譚は、巻第一「同人捕化鳥」の部分である。この記事は、清盛が怪鳥（化鳥）を捕えることによって、安芸守に任ぜられるという、出世譚の型をなしている。

夜半計ニ及テ、南殿ニ鵠ノ声シテ、一鳥ヒメキ渡タリ。（中略）左衛門佐ニテ、問近候ケレバ「清盛」ト答。「南殿ニ朝敵アリ。罷出テ搦ヨ」ト仰ス。（中略）而ルヲ清盛、綸言ノ下ニ朝威ヲ重ジテ、怪鳥ヲ取事ヲ得タリ。（中略）「天下安穩ニ万民愁ヲ休メンニハ、怪異ヲ鎮テ進スルニハ不_レ如。コレ非_二朝敵鎮_一ヤ。勲賞アルベシ」トテ安芸守ニナサル。

ここでは、南殿にて「鵠ノ声」がして鳥が一羽飛んでいったという。このとき鵠の声と記されているが、源頼政の鵠退治とは異なり、捕らえた鳥については具体的には描写がされていない。ここでは「怪鳥」と記述されているのみで、「鵠」と断定されているわけではない。

この章段では、「綸言ノ下ニ朝威ヲ」云々の表現からも、怪鳥は朝敵であることが窺え、宮中から排除されるべき存在として描かれている。一方で、先に挙げた第一の怪異の「大ナル狐」は、射られる前に女に変身し、かつ清盛の敬礼を受けてから去っている。同じ怪異的な存在であっても、両者の間には排除されるモノ／＼れないモノの違いがあるといえよう。

(3) 第三の怪異譚は、巻第二「新帝御即位崩御」の以下の部分である。

永万元年ノ春ノ比ヨリ主上御事有ト聞エシカバ、其年ノ夏ノ始ニ成シカバ、事ノ外ニ重ラセ給ケレバ、大蔵大輔紀兼盛ガ娘ノ腹ニ、二歳ニナラセ給フ皇子ノ御座ケルヲ、皇

太子ニ立テ奉ル可キ由聞ヘシ程ニ、六月廿五日、俄ニ親王ノ宣旨ヲ被_レ下テ、ヤガテ其夜位ヲ譲リ奉セ給ヒキ。何トナク上下周章タリ。（中略）

永万元年六月二十七日ニ、大極殿ニシテ新帝御即位ノ事アリシニ、同七月廿三日ニ春寛法印御驗者ニ参リ折申ケルニ、御邪氣始テ顯テ讃岐院ノ御靈トゾ聞エシ。同二十八日ニ新院隠レサセ給ニケリ。御歳二十二、位ヲサラセ給テ僅ニ三十余日也。天下憂喜相交テ不_二取敢_一事也。

二条院（新院）の、六条天皇への讓位を経て「崩御」に至る過程について記した記事である。直接の死因は記述されていないものの、即位に際して春寛法印が加持祈禱を行うと「讃岐院ノ御靈」が顯れたという。したがって、ここでは「讃岐院ノ御靈」が二条院を呪い殺したと考えるのが妥当であろう。

(4) 第四の怪異譚は、巻第三「那智籠山」の以下の部分である。ここでは、那智山に花山法皇が参詣した際、龍神に鮑を奉ったこと、天狗を遠ざけるために安倍晴明が魔類を置いたということが記されている。

彼花山法皇ノ御行ノ其間ニ、様々ノ験徳ヲ顯サセ給ケル。其中ニ、龍神アマクダリテ、如意宝珠一顆、水精ノ念珠一連、九穴ノ鮑貝一ヲ奉ル。法皇此供養ヲメサレテ、末代行者ノ為ニトテ、宝珠ヲバ岩屋ノ中ニ納ラレ、念珠ヲバ千手堂ノヘヤニ納ラレテ、今ノ世マデモ、先達預_レ之渡ス。鮑ヲバ一ノ滝壺ニ被_二放置_一タリト云。白河院御幸ノ時、彼鮑ヲ為_レ被_レ見、海人ヲ召レテ滝壺ニ入ラレタリケレバ、貝ノ大サハ傘バカリトゾ奏申ケル。参詣上下ノ輩、万ノ願ノ満事ハ、如意宝珠ノ験

也。飛瀧ノ水ヲ身ニフルレバ、命ノ長事ハ、彼蛇ノ故トゾ申伝タル。花山法皇ノ御籠ノ時、天狗様々奉^レ防ケレバ、陰陽博士安倍晴明ヲ召テ、被^ニ仰^ハ含^ニケレバ、晴明、狩籠ノ岩屋ト云所ニ、多ノ魔類ヲ祭り置。那智ノ行者不法懈怠ノアル時ハ、此天狗共嘖ヲナシテ恐シトゾ語伝タル。

後半の天狗が登場する話は、陰陽師の安倍晴明の知恵や知識によつて、天狗を岩屋へ近づかせなかつたというものである。前者の花山法皇による龍神への供養譚と、後者の晴明の天狗鎮定譚は、一つの物語で表裏の關係をなしていると言える。

(5) 第五の怪異譚は、卷第三「成親望大将」に見られる。藤原成親が左大将になりたいがために、諸寺諸社に大願を立てて祈り、また成親自らも諸寺諸社に籠つて祈誓したという内容である。また、この章段では、不吉なことを予言されたのちに、実際に怪異を体験するという構成がとられている。

若又殿ノ三位中将師家ナンドヤ成給ハンスラント申ケル程ニ、新大納言成親卿、ヒラニ被^ニ望^ハ申^ニケリ。院ノ御気色モヨカリケレバ、内外ニ付テ奏申ケル上ニ、諸寺諸社ニ様々ノ大願ヲ立テ祈申。大納言自春日ノ社ニ七箇日籠テ、祈誓シ給ケレ共、指テ驗ナケレバ、貴僧ヲ八幡宮ニ籠テ、信読大般若ヲ始給ヘリ。信読半分計ニ成テ、高良大明神ノ御前ナル楠ノ木ニ、山鳩ニ羽出来テ、食合落テ死ニケリ。「大菩薩ノ第一ノ仕者也。是直事ニアラズ」トテ、時ノ別当聖清此由ヲ奏聞ス。即神祇官ニテ御占イアリ。「天子大臣ノ非^ニ御慎^ハ。臣下ノ怪異」トゾ申ケル。成親卿ハコレニモ更ニ恐ズ、猶又賀茂上社ニ、仁和寺ノ俊堯法印ヲ籠テ、孔雀經ノ法ヲ行、下ノ若宮ニハ、三

室戸ノ法印某籠テ、茶吉尼ノ法ヲ修ス。七箇日満日、晴タル空俄ニ曇、雷電ニ響キ、風吹雨降ナンドシテ、天地震動スル事二時バカリ有テ、彼宝殿ノ後杉ニ雷落係テ燃ケリ。雷火他ニ不^レ移トコソ云伝タレドモ、若宮ニ移テ社ハ焼ニケリ。「神ハ不^レ稟^ニ非礼^ハ」ト云事ナレバ、非分ノ事ヲ祈申サレケレバ、係ルフシギモ出来ニケリ。大納言ハ、「僧モ法モ輕テ信心ガナケレバコソ、神モ不法ノ祈誓ヲトガメテ、加様ノ懈怠モアレ」トテ、七日精進シテ、下社ニ七箇日籠テ、所願成就ト被^レ申ケリ。七日ニ満ズル誰カレ時バカリニ、夢現トモ覺エズ、赤衣ノ官人二人来テ、大納言ノ左右ノ手ヲ引張、社頭ノ白砂ニ引落ス。コハイカニトオボス処ニ、大明神、御殿ノ戸ヲ推ヒラカセ給ヒテ、カク、

桜花賀茂ノ河風恨ナヨ散ヲバワレモエコソトメネ
と、高ラカニ大納言ノ耳ニ聞エケレバ、身ニシミオソロシクテ、大将ノ所望ハヤミニケリ。

右では、前半部で山鳩二羽が「食合落テ死」ぬという不吉なことが起こり、続けて雷・風・地震などの所謂自然の異常が生じている。「晴タル空俄ニ曇」であつたといひ、完全な悪天候の最中に起こつた現象ではない。成親は怪異や「フシギ」を引き起こしたにも拘らず、自身の野望を遂げることができなかったわけである。彼は後にさらに平家討伐を考えるに至るのであり、その意味でこの「成親望大将」は、予兆的な内容を含む記事になっている。以上のことから、卷第三「成親望大将」では、異常な自然現象は今後の展開の伏線の役割を担っていると見ることが出来る。ここではそれは、成親の平家討伐に至る動きと関わりあっているの

ではないだろうか。

(6) 第六の怪異譚は巻第四「白山神輿登山」に記されている。ここで登場するのは、猿のような人・雷電である。ここでは「比叡辻ノ神主ガ夢ニ見タリケルハ」というように夢の中が舞台となっている。以下本文を確認していく。

舟ゴトニ狩衣ニ玉襷アゲタル者ノ、北ヘ向テ舟を漕。「イカナル人ノ御者詣ゾ」ト問バ、「白山権現ノ神輿ノ御上洛之間、御迎ニトテ山王ノ出サセ給御舟也」ト申。角云者ノ姿ヲミレバ、身ハ人、面ハ猿ニテゾ有ケル。打驚タレバ汗身ニアマレリ。不思議ヤト思、立出テ四方ヲ見渡セバ、此山ヨリ黒雲一叢引渡、雷電ヒビキテ氷ノ雨フリ、能美ノ山ノ峯ツギ、塩津、海津、伊吹ノ山、(中略)皆白平ニ雪ゾ降。

ここにあらわれる「身ハ人、面ハ猿」のモノについては、頭注に拠ると「日吉山王の使者は猿とされ」ているとある。つまりこの猿のような人は神の使いであると解釈される。そして「黒雲一叢引渡、雷電ヒビキテ氷ノ雨降」つたという。前文に「不思議ヤト思、立出テ四方ヲ見渡セバ」とあることから、この章段の自然現象も先にみた巻第三「成親望大将」と同様、ここでも急に悪天候へと変わったのだと理解ができる。要するに、急な天候の変化があつてこそ、自然現象の怪異があらわれるのである。

(7) 第七の怪異譚は巻第四「山王垂跡」に記されている。比叡山の僧である澄憲の説法が行われた夜、天皇が夢を見られた。その夢は、天童二人が比叡山から下つて、京の病者たちを治癒するという内容である。この話は一種の鬼退治の型をもなしているといえよう。

飢饉ニ責ラレ疫病ニ侵レテ、親ニ後ル子、恩徳ノ高キ涙ヲ流シ、子ヲ先立ル親、哀愍ノ深キ袖ヲ絞ル。兄弟夫婦互ニ別亡ケレバ、京中モ田舎モ皆触穢ニテ、社參ノ者ナシ。折節四月上旬ニテ、導師説法ノ終ニ「卯月ハ神ノ月ナレドモ、再拜ト云人モナク、八日ハ薬師ノ日ナレドモ、南無ト唱ル声モセズ。緋ノ玉垣地ニ倒、青葉ノ袖モ不_レ差ケリ」トシタリケレバ、三千ノ衆徒一同ニ黒染ノ袖ヲゾ絞ケル。神明御納受有ケレバ、即夜ニ帝ノ御夢想ニ、比叡山ヨリ天童二人下テ、左手ニ瑠璃ノ壺を持、右ノ手ニ袖ノ枝ヲ持テ、袖ヲ壺ノ水ノ指入テ、京中辺ノ病者ニ灑ケレバ、家々ヨリ青鬼赤鬼イクラト云数ヲ知ズ出テサルト叙覽アリ。

袖を使って病者に水を灌ぐことで「家々ヨリ青鬼赤鬼」をあぶりだしている。ここで「青鬼赤鬼」は、病の原因をなす存在とみなされているのであろう。

(8) 最後の事例は、巻第六「幽王褒似烽火」の記事である。周幽王が褒姒という美人を后とし、寵愛するが、この褒姒の正体は狐であつたというものである。頭注によると、この章段の話は「史記」の第四周本紀に概ね拠っているという。

此后三千ノ寵愛ニスグレ、万女ノ綺羅ニ越タレドモ、笑事サラニ御座サズ。王コ、ロモトナク思食テ、「宮中ニ心ヲトメ給ハヌニヤ。イカッシテ笑顔ヲ見ン」ト思食ケルニ、大国ノ習、朝敵ヲ禦ギ亡サントテ、官兵ヲ召時ハカナラズ烽火ヲ揚ル事アリ。(中略)異賊幽王ヲ可_レ奉_レ傾之由聞ヘケレバ、飛火ヲアゲテ兵ヲメス。官兵馳集テ旗ヲナビカシ。戈ヲサ、ゲテ、鏹ヲ並ベ時ヲ作りケルニ、后始テ笑給ヘリ。サラヌダニ

見目形タグヒナクウツクシカリケル上、咲給ヒタリケレバ。イトゞ百ノ媚ヲ増給フ。帝ウレシキ事ニ思召、常ニ飛火ヲ揚ラレテ兵ヲ集給フ。(中略)幽王忽ニ滅ニケリ。サテコソ后ヲ褒姒僻愛トハ申ケレ。又は傾城トモ名タリ。都ヲ傾ト云フ読アレバ、当初ハ誠ケレドモ、近來ハ人ゴトニ傾城トゾ呼ケル。彼后幽王亡給テ後、尾三ツアル狐ト成テ、コウく鳴シテ古キ塚に入ニケリ。狐人ヲ蕩トテハ、「化シテ婦人ト成テ顔色好、頭ハ雲ノ鬢ト変ジ、面ハ嚴キ粧ト成テ、翠眉不_レ拳華ノ顔低タリ、忽然ニ一タビ笑バ千万ノ態有、見人十人ガ八九ハ迷ヌ」トゾカ、レタル。

「幽王褒似烽火」は、前にある章段の「同人召兵」の流れを引いている。平重盛が父の清盛に対して進言をしている際に、幽王の名が出てくるのである。つまり、この「幽王褒似烽火」は「同人召兵」を補助する位置付けにあるといえよう。ただ、「幽王褒似烽火」は先に挙げた褒姒の正体が狐であったという話とは別に、同一の章段にて褒姒の別の話を紹介している。すなわち褒姒は亀の子であるとするもので、この話に白龍が登場するのである。

或説云、褒姒ハ亀ノ子也。周ノ厲王ノ時、南庭ニ二ノ白龍出来テ蟠居レリ。帝イブセク思食ケレバ、可_レ殺ヨシ宣下セラレケルヲ、大臣公卿僉議アリテ云、「龍ハ命長シテ必如意宝珠持ト云ヘリ。(中略)二龍恩ヲ報ズトヤ思ケン、暫庭上ニ泡ヲ吐テ去ヌ。

二、覚一本との比較

本稿で取り扱っている盛衰記の章段のうち、覚一本に該当する

記事が認められるのは、盛衰記の巻第二「新帝御即位崩御」、巻第三「成親望大將」、巻第六「幽王褒似烽火」である。ただし、内容はほぼ同様であるものの、性格が異なっている記事もある。次からそれぞれに該当する覚一本の記事を見ていく。

i) 盛衰記巻第二「新帝御即位崩御」に該当する覚一本の記事は、巻第一「額打論」である。後者の冒頭に

さる程に、永万元年の春の比より、主上御不豫の御事と聞えさせ給しが、夏のはじめになりしかば、事の外に重らせ給ふ。是によつて、大藏大輔吉兼盛が娘の腹に、今上一宮の二歳にならせ給ふがましくけるを、太子に立てまいらせ給ふべしと聞えしほどに、同六月廿五日、俄に親王の宣旨下されて、やがて其夜受禪ありしかば、天下なにとなうあはてたるさま也。

さる程に、同七月廿七日、上皇つゝに崩御なりぬ。御年廿三、つぼめる花の散れるがごとし。玉の簾、錦の帳のうち、皆御涙にむせばせ給ふ。やがてその夜香隆寺のうしろとら、蓮台野の奥、船岡山におさめ奉る。

と、盛衰記と同じ七月廿七日の記述が認められるものの、二条天皇の病氣にをめぐつて占いをしておらず、讃岐院の御霊が顕れるといった内容は見受けられない。覚一本と比較したとき、盛衰記は新に怨霊という未知なるものを二条天皇の病氣の原因としていることが窺える。

ii) 盛衰記巻第三「成親望大將」に該当する記事は、覚一本巻第一「鹿谷」である。後者の記述を見ていくと、

其外故中御門の藤中納言家成卿の三男、新大納言成親卿もひ

らに申されけり。院の御気色よかりければ、さま／＼の祈をぞはじめられける。八幡に百人の僧をこめて、進読の大般若を七日よませられける最中に、甲良の大明神の御まへなる橘の木に、男山の方より山鳩三飛来ッて、くいあひてぞ死にける。「鳩は八幡大菩薩の第一の仕者なり。宮等にかゝる不思議なし」とて、時の検校匡清法印、此由内裏へ奏聞す。神祇官にして御占あり。「天下のさはぎ」とうらなひ申。「但君の御つゝしみにあらず、臣下のつゝしみ」とぞ申ける。新納言はおそれをもいたされず、昼は人目のしげければ、夜なく歩行にて、中御門烏丸の宿所より賀茂のかみの杜へ七夜つゞけて参られけり。七夜に満ずる夜、宿所に下向して、くるしさにうち臥しちつとまどろみ給へる夢に、賀茂の上の杜へ参りたるとおほしくて、御宝殿の御戸おしひらき、ゆゑしくけだかなる御声にて、

さくら花かもの河風うらむなよ散るをばえこそとめざりけれ

新大納言、猶おそれをもいたさず、賀茂の上の杜に、ある聖をこめて、御宝殿の御うしろなる杉の洞に壇をたてて、拏吉尼の法を百日おこなはせられけるほどに、彼大相に雷落ちかかり、雷火緩うもえあがッて、宮中既にあやうく見えけるを、宮人どもおほく走集まッて是をうち消つ。

と、盛衰記の鳩をめぐる扱いや雷の描写が同一であることがわかる。このように成親の怪異譚は同様であるものの、重要なのは、挿歌のタイミングが異なっている点である。盛衰記では雷や地震が起きたあとの末尾に挿歌されているが、覚一本では雷が落ちる

前に挿歌されているのである。この相違は、成親の性格が盛衰記と覚一本では異なることを示唆している。すなわち、覚一本は、この和歌が挿入される時点で既に悪役としての成親を描いているのではないだろうか。

iii) さいごに、盛衰記巻第六「幽王褒似烽火」に該当する記事は、覚一本巻第二「烽火之沙汰」である。この記事は盛衰記においては、重盛が清盛を説得する話と幽王・褒似の故事に分かれていたが、覚一本の場合は、重盛が清盛を説得する記事の中で、部下に幽王・褒似の故事を語っているという明らかな違いが見られる。

小松殿には、盛国承ッて、着到つけけり。馳参たる勢ども、一万余騎とぞしるいたる。着到披見の後、大臣中門に出て、侍共にの給ひけるは、「日來の契約をたがえず参りたるこそ神妙なれ。異国にさるためしあり。周幽王、褒似と云最愛の后を持ち給へり。天下第一の美人也。されども、幽王の心になはざりける事は、褒似咲を服先ずとて、すべて此后わらう事をし給はず。異国の習には、天下に兵革おこる時、所とに火を揚げ、太鼓をうッて兵を召すばかり事あり。是を烽火と名づけたり。或時天下に兵乱おこッて烽火を揚げたりければ、后これを見給ひて「あなふしき、火もあれ程おほかりけるな」とて、其時初てわらひ給へり。この后、一たびゑめば百の媚ありけり。幽王うれしき事にして、其事となう、常に烽火を揚げ給ふ。(中略)其時都傾いて、幽王終に亡にき。さてこの后は、野干となッてはしり失せけるぞおそろしき。(後略)」右は、盛衰記巻第六「幽王褒似烽火」と内容はほぼ同一の内容であると言つていいだろう。ただ盛衰記の「后幽王亡給テ後、尾

三つアル狐ト成テ、コウく鳴シテ古キ塚に入ニケリ。」などという、どのような姿であったかについての記述は覚一本には見られない。覚一本は「野干となつてはしり失せけるぞおそろしき。」と褒姒のことを淡白に述べるにとどまっている。その理由は重盛が部下らに語る上で、特段重要ではない事柄であったからだろう。

三、まとめにかえて

以上、盛衰記の巻第一から巻第六の中で怪異譚と確認できる八つの記事を見ていった。その上で、覚一本において対応する記事を参照し、比較を行った。覚一本とは同一の内容の記事もあるが、本稿で見た盛衰記の記事の殆どは独自性を保有していると考えられる。

久留島元氏は、「怪異」について

「怪異」は単なる怪しい事件、不思議な現象ではなく、国家（王権）や、その周辺の宗教者によって「怪異」と選別され、管理されるものであった。そうした古代以来のシステムによって管理される予兆としての「怪異」が、日本社会において次第に拡大、拡散し、現在「あやしいこと、ふしぎまこと」をさす語彙として定着してきた⁵⁾。

と説明し、怪異は王権と切り離されない存在であったとしている。そして、

日本における「怪異」の形成史をふまえると、「怪異」とは起こった現象や存在そのものが特殊なわけではない。それを「怪異」と認識、記録した主体と、その認識を受容した社会との関係のなかで生まれることがわかる。⁶⁾

と論じている。つまり怪異が生じるのは、社会がどのようにに認識するかによるのである。

覚一本と比較して盛衰記の中に怪異譚が多く存在するのは、成立した時代の社会において、怪異として扱われるモノが増殖したからであろう。そして、それは天皇王権や仏法との関係性だけで説明することができない別の要素を怪異譚に想定する必要があることを示しているのではないだろうか。

注

(1) 市古貞次ほか校注『中世の文学 源平盛衰記(一)』(三弥井書店、一九九一年四月)を底本としている。

(2) 梶原正昭・山下宏明校注『新日本古典文学大系 平家物語上』(岩波書店、二〇一三年一月)

(3) 国文学の分野で怪異を本格的・系統的に研究しているのは数少なく、田中貴子著『外法と愛法の中世』(二〇〇六年、平凡社)が筆頭ではないかと考える。民俗学周辺では、小松和彦編『怪異の民俗学』(8)境界』(河出書房新社、二〇〇一年六月)や、東アジア怪異学会編『怪異学の技法』(臨川書店、二〇〇三年十一月)等、怪異についての研究が盛んである。

(4) 盛衰記では巻第十六「三位入道芸等」にて鶴退治譚が描かれている。

(5) 久留島元著「妖怪・怪異・異界——中世説話集を事例に——」(東アジア怪異学会編『怪異学の地平』(臨川書店、二〇一八年十二月))

(6) 注5に同じ

(うすい ななみ／神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程)